

2 “新旧混在”で活動を繰り広げる東海、紀伊地方

一宮市が最も多数を占める愛知県

大阪、兵庫に隣接する東海、紀伊半島地域における石井方式の実践園は、古くからのものと、比較的新しく、というところが混在しているようです。

愛知県では割合後者に属する実践園が多いと思われます。とくに一宮市にはこうした実践園が多く、10か園近くがあります。

たとえば千秋幼稚園、大和東幼稚園、丹陽幼稚園などは、いずれも昭和52、3年ごろから実践に乗り出しております。

千秋幼稚園の場合、初め、石井先生に來園してもらい、父兄にお話や公開授業を行なってもらったところ、父兄の側からは反発や苦情どころか、逆に「ぜひ石井方式を」との熱望があり、採用を決めたといえます。また、その熱心のほどは、もちろん父兄だけのものではありません。当時、全教師が直接石井先生の指導を仰ぎ、その後も、各教師とも年一回は自ら公開保育をするなど研修に務めていますし、石井教育研究会にも必ず毎年教師を参加させ、その教師は帰園して、他の教師へ伝達講習を行なうなど、教える側も勉強熱心な取り組みをしているのです。

昭相58年度の園児数210余名。出生率の低下と相まって、全般的にどこでも園児数が減少しているにもかかわらず、中村正治園長は「石井方式を採用しているので、そうでない園にくらべて減り方が少ない」と述べていますが、これなど、石井方式に寄せる父兄の期待感の

強さを表わしているものと思われます。同様に、中村先生の「卒園児は小学校で優秀な成績をおさめていますから、父兄のみなさんに感謝されています」という言葉に、父兄がなぜ期待する気持ちを持つのか、その要因がうかがわれるというものです。

同じく一宮市内にある小島幼稚園では、昭和55年から石井方式を採用しています。その前の年の9月に、石井先生から教師のみなさんが講義を受けるなどの準備をした上で踏み切りました。やはり子どもたちは新聞をよく読むようになったり、小学校の生徒よりもずっと漢字に興味を持って、テレビや街なかの看板類を見るようになったといい、また、子どもたちに全体的に集中力が出てきたことなどを、これまでの成果としてあげています。

“わが道を行く”名古屋市・牧野幼稚園

この地方で、最大の人口を持つ名古屋市は、意外に実践園が多くはありません。そのなかで、中村区にある牧野幼稚園は、漢字学習を昭和50年代の初めから実施しており、現在、約160人の園児がそれを行なっています。導入の直接のキッカケは、やはり園の先生方が石井先生の講演を聞いたことにあるといえます。そのあとすぐに、石井先生を園に招いて、父兄にも参加してもらい、公開授業と講演会を開き……とスピーディな展開を見せました。

ところで、一般的に、幼稚園と小学校との“対話”が少ないことが指摘されています。そのため、お互いの意志疎通に欠ける面がいささかあると思われるのですが、とくに石井方式の実践園とその近隣小学

校との間には、漢字学習の扱いをめぐって密接な交流が必要となるにもかかわらず、現実にはなかなかそれが果たされていません。そのため、残念なことに、小学校が実践園に対して誤解を持つ傾向がまだあると見られています。

こういう風潮のなかで、この牧野幼稚園の所在する近辺を含む小学校の学区(牧野学区)では、隣接するもう一つの学区とともに、二つの学区内の小学校と幼稚園との懇談会が、年に一度ではありますが開かれているのです。小学校からは校長、教頭、それに一年生の教務主任クラスが、幼稚園は主事、主任クラスが各々出席するそうで、たとえば昭和58年の場合、2月に開催され、約30人が出席したとのこと。

話題はいろいろなことに及びましたが、漢字学習を実践する牧野幼稚園が出席するため、やはり「漢字」に話がふれざるを得ないようです。小学校からの意見として代表的なものは、“あいうえお”と“漢字”のバランスを取ってもらいたい”ということ。つまり、暗に小学校の“歩調”に合わせてもらいたいというほのめかしではないかと、牧野幼稚園では解釈しています。

卒園生が小学校へ上がると、その読書力、集中力などが、他園から来た子どもたちより高い、という評価が学校側にあるせいか、頭ごなしの漢字学習否定論は、さすがに見受けられないらしく、もっぱら子どもたちの間の“バランス”をどう取るか、という観点からの「漢字学習をさし控えられたい」という見解でしょう。

これに対し、中村区内20数園のなかの唯一の実践園である牧野

幼稚園は、孤立しているといえばそうなのですが、いわば“静観”の構えで、あわてず騒がず、わが道を行くといったところ。

近郊幼稚園への石井方式の普及についても、努力をしていますが、なかなか思うようにいかないらしく、昭和57年の10月に催した公開保育のさいなど、百数十人の先生方が来園したそうですが、区内からは全く来なく、かえて名古屋市外や岐阜県、三重県といった他県からの、それも保育園関係の参会者が目についたほどといいます。

この牧野幼稚園では、漢字絵本を読み、漢字カルタを使ったお話づくり、といった遊びのほか、力を入れているのが、「貸出図書館」活動。一週間に2回、約300冊の本を子どもたちに開放しているそうですが、家庭へ持ち帰った子どもたちに、母親と一緒に読んでもらい、そして、母親に子どもたちの反応や感想をメモしてもらって、図書とともに返却させるという試みを行なっています。

こうして、子どもと親はもちろん、親と幼稚園とのコミュニケーションも計ろうとするわけです。

こんな活動が効を奏したのか、卒園まもない子どもたちの読書力について、石井先生が小学校四、五年生ぐらいの力を持っていると評したことがあるそうで、ますます意を強くし、この試みを継続、発展させようとしているのです。

その他、名古屋市内で漢字学習に取り組んでいるところに、港区の善進保育園などがあります。全体として、愛知県では、保育園の関心が高まってきていると思われます。

さて、一宮市、名古屋市以外では、尾西市の尾西幼稚園が、昭和

58年に採用したばかり。同年5月に、初めて石井先生の講演会、公開保育を催したのですが、そのさい、子どもたちが示した漢字に対する強い関心に、父兄からも漢字学習の実践に対して、大歓迎の声があがったといえますから、今後の活動が大いに楽しみといえます。

このほかに、愛知県では、西尾市、春日井市、豊橋市、稲沢市などに実践園が散在しており、岡崎市の本宿幼稚園は牧野幼稚園の分園として活発な実践を見せています。

“古参実践園”として知られる三重の清泉幼稚園、 和歌山の紀伊保育園

三重県の津市には、昭和45年に石井方式の採用という“古参”の幼稚園 清泉幼稚園があります。最初の石井先生の来園、公開授業実施が43年だったといえますから、石井方式への関心は、かなり以前からあったものです。

採用の動機は「園長が国語漢文学の専攻であったため、漢字に関心が強く、幼児の漢字教育の重要性を感じていたから」としていますが、「当園では漢字遊びを嫌う子はほとんどいません」と、170名近い園児たちにとっても大いにプラスになったようで、また、卒園児が小学校で示す漢字の読み書きの力に、小学校の先生方も喜び、かつ驚いていると報告しています。

これに負けず劣らず古くから導入しているのは、和歌山市の紀伊保育園。子どもたちの集中力、思考力を養う上に最適と考え、昭和48年から実践し始め、当初の意図通り、意欲的に子どもたちが取り組ん

でいると、評価しています。園児数60名余りの“小粒”な幼稚園のため、四、五歳児混合のクラス編成をしていて、四、五歳児とも同じ漢字絵本を使って、同じように遊んだり、読んだりしているそうです。